

アトサヌプリの特徴

アトサヌプリは、約 1700 年前の噴火によって出来たアトサヌプリ古期円頂丘と、その後、数百年を経て出来上がったアトサヌプリ新期円頂丘で形成されている二重構造の活火山です。山頂には「熊落とし」と呼ばれる爆裂火口があり、数百年前の噴火で出来上がったと考えられています。現在も火山活動が続いており、古期円頂丘と新期円頂丘の構造上弱いところから噴煙が上がっています。その数は大小合わせて 1500 以上。噴気孔の周りには黄色の昇華イオウの針状結晶を見ることができます。

アトサヌプリに近づくにつれ、強い硫化水素の匂いを感じますが、噴気孔のガスの成分は、平均的には水蒸気が 97～98%で火山性ガス（硫化水素、二酸化硫黄、二酸化炭素、その他）が 2～3%となります。

※円頂丘…粘度の高い溶岩が盛り上がってできたドーム状の地形のこと

アトサヌプリ火山活動史

時期	内容
数百年前	熊落とし火口、水蒸気爆発
1000～1500年前	新アトサヌプリ、ドーム形成
1500年前	アトサヌプリ火口水蒸気爆発
1500～5000年前	マクワンチサップ、アトサヌプリドーム形成
5500年前	リシリドーム形成、火砕流
5500～10000年前	多数のドーム形成（サワンチサップ、オプタテシケ、トサモシベ、ニフシオヤコツ、274m山、丸山、ヌプリオンド）
20000～30000年前	オヤコツ、252m（石山）ドーム形成、アトサヌプリ火砕流／カルデラ形成、アトサヌプリ成層火山

アトサヌプリ 硫黄採掘の歴史

川湯を含めた釧路地方の産業が発展するきっかけとなったのは、明治初期に始まったアトサヌプリの硫黄採掘事業でした。当時、硫黄はマッチや火薬の原料として世界中で需要が高まっている鉱物だったのです。

もともとはアイヌの人々がアトサヌプリで採れる硫黄を焼き付けとして利用していると聞いた釧路の漁場持・佐野孫右衛門が現地調査を行ったのが始まりでした。その結果、質も量も豊富であることがわかり、明治 10（1877）年に本格的に採掘が始まり、全道で恵山（函館）に続く第 2 位の採掘量となりました。

採掘して精錬された硫黄は、アトサヌプリ～標茶までは馬で、標茶から釧路までは舟で運ばれていました。

アトサヌプリの鉱山経営は佐野孫右衛門から函館の銀行家・山田慎に移ります。この時の鉱夫たちは、当時標茶に新しく開庁した釧路集治監の囚人たちでした。

その後、山田慎は同じ銀行家である安田善次郎と共同経営することにしました。安田善次郎は安田財閥の創始者であり、これ以降行われるアトサヌプリ採掘事業を大きく展開していくことになります。

北海道で 2 番目の鉄道

硫黄の大量運搬を考えていた山田慎の計画を基本に、明治 20（1887）年 12 月にアトサヌプリ～標茶間の線路が開通しました。当時は小樽に続き、北海道で 2 番目に出来た鉄道で、安田鉄道とも呼ばれていました。走らせていた蒸気機関車も、アメリカから輸入したものを使用し、標茶にも新たに蒸気精錬所が建てられました。



当時使用していた S L「進善号」

硫黄採掘の終わり

鉄道の導入に伴い、大量の硫黄を採掘した結果、明治 29（1896）年には掘り尽くし、安田善次郎は硫黄採掘事業を休止することにしました。安田鉄道も廃止となり、北海道庁に買い取られ、釧網本線の基盤となりました。

その後、経営者が移り変わり、断続的に採掘事業は行われていましたが、昭和 38（1963）年に野村鉱業所が閉山となり、明治初期から続いていた鉱山・アトサヌプリの歴史に幕を下ろしました。



大正初期の硫黄運搬風景

川湯温泉のはじまり

明治まではほとんど人の行き来が無かった川湯温泉も、アトサヌプリの採掘事業によって、工夫たちのための宿などが始まっていきました。しかしながら、多くの宿は長く続かず、今の川湯温泉の形へとなっていったのは、昭和初期頃でした。

そのきっかけは、釧路と網走を繋ぐ釧網線の開通。昭和 6（1931）年に全線開通し、多くの人々が川湯温泉や硫黄山を訪れるようになりました。その後、雄大で原生的な自然が評価され、昭和 9（1934）年に「阿寒国立公園」として全国で 2 番目の国立公園に制定され、観光地として有名になっていきました。

※平成 29（2017）年 8 月「阿寒国立公園」は「阿寒摩周国立公園」に名称変更されました。

硫黄山鉄道の名残

アトサヌプリの採掘事業が終わり、鉄道が走らなくなった線路跡は、当時「青葉トンネル」と呼ばれて生活道として使われていました。

現在も JR 川湯温泉駅とアトサヌプリをつなぐ散策路として利用されています。また、馬車や馬そりの期間限定のヒストリーツアーも実施されています。



冬の馬そりツアー

アトサヌプリ周辺の特異な植物 カワユエンレイソウ

1996 年に発見された川湯地域の固有種で、オオバナノエンレイソウとミヤマエンレイソウの交雑種といわれています。オオバナノエンレイソウとミヤマエンレイソウの両方が自生している地域は多くありますが、カワユエンレイソウはほぼこの地でしか見られないため、アトサヌプリが影響しているのではないかと考えられています。

葉：茎頂に 3 枚輪生し、広卵状菱形で先が尖る。

花：3 枚の白い花弁が横向きにつく。長さ 2.5～3cm の広卵型で、先がやや尖る。雄しべは 6 本で雌しべと同長か短く、葯は花糸の約 2 倍。



カワユエンレイソウ



オオバナノエンレイソウ



ミヤマエンレイソウ